

学会長 日野原重明先生を偲ぶ

日本医療秘書学会 理事
鈴木 隆一郎



日野原重明先生は、この日本医療秘書学会の初代会長として、14年あまりにわたって私たちを導いてくださった偉大な指導者でした。

その指導者を、私たちは、昨年(2017年)の7月18日に喪ってしまいました。

谷口学術大会長と準備委員会のご指名により、本日(2018年2月18日)ここに、われらが学会長、日野原重明先生を偲ぶ、追悼の講演をさせていただきます。

日野原重明先生ご略歴

- 1911(M44).10.4 山口県で誕生
- 1937(S12) 京都帝国大学医学部卒業、第三内科入局
- 1941(S16) 聖路加国際病院 内科医
- 1951(S26) 米国エモリー大学医学部 留学(在:ジョージア州アトランタ)
- 1974(S49) 聖路加看護大学学長
- 1988(S63) 医療秘書教育全国協議会会長
- 1992(H04) 聖路加国際病院 院長
- 1995(H07) オウム真理教地下鉄サリン事件発生 被害者640名を救護
- 1996(H08) 財団法人 聖路加国際病院 理事長、聖路加国際病院 名誉院長
- 2004(H16) 日本医療秘書学会 学会長
第1回日本医療秘書学会学術大会 学術大会長
- 2017(H29).7.18 永眠 行年105歳

日野原先生のご経歴をよくご存じの方々からのご批判を覚悟の上で、105年9ヶ月にわたる先生のご生涯を、あえて、たった1枚のスライドでご紹介申しあ

げます。

先生は、1911年、すなわち明治44年10月4日に山口県でお生まれになりました。

大正時代に少年期をおくられ、1937年、昭和12年に当時の京都帝国大学、現在の京都大学の医学部を卒業され、内科医としての道を歩み始められました。

1941年、太平洋戦争が始まる直前に、東京の聖路加国際病院に内科医として赴任されます。そしてその後のご生涯を、聖路加の人として送られることとなります。

その中で、終戦を迎えて6年後の1951年に、米国ジョージア州アトランタにあるエモリー大学医学部に1年間留学されました。エモリー大学では、数々のことを学ばれたと思いますが、特にパラメディカルスタッフの働きが印象深かったように思われます。とりわけ看護師と医療秘書の働きに注目されたようです。医療秘書という専門職は、当時未だわが国にはありませんでした。

恐らくこのご経験が、帰国後、聖路加において、まず看護教育に力を注がれる動機になったと推察されます。その結果、1974年から、聖路加看護大学の学長をお勤めになることになったと考えます。

時を同じくして、この前後から、わが国においても先駆的な方々のご努力により、医療秘書養成を行う専門学校があらわれ始めます。養成校の数が増すに連れて、教育水準の統一・向上の必要性が認識され、1988年1月に全国の先駆的な専門学校35校によって医療秘書教育全国協議会が設立され、日野原先生が、その初代会長に就任されました。以降、医療秘書教育全国協議会は先生のご指導のもと、医療秘書技能検定試験をはじめ各種の検定試験などを通じて医療秘書教育の水準統一と向上に貢献し、のちに述べるように、この日本医療秘書学会を生みだすに至ります。

他方この当時、先生は聖路加財団の常務理事として、建設中の新病院に画期的な機能を持たせようとして

おられました。それは大規模災害時に、多数の被災者の救命救急処置を臨時に行えるように、ロビー、ホール、廊下、チャペル内部にまで、いたるところに電源と酸素供給口を設置しておくことであったそうです。無駄遣いと非難は多々あったそうですが、先生のお考えの通りの新聖路加国際病院が1992年に完成し、その院長にご就任になりました。そして病院職員をはじめ、看護大学学生まで動員する大規模災害対応の訓練もされておられたそうです。

するとその3年後、1995年3月20日の朝に、オウム真理教による地下鉄サリン事件が勃発します。聖路加国際病院の目の前の築地駅を含め、近隣の地下鉄駅で多数の被害者が発生した状況に対して、日野原先生は、ただちに全外来診療を中止し、救急救命を要する患者の無制限受け入れを表明されました。日頃の訓練の通りに行動した全職員と看護大学生を指揮されて、640名あまりの救命救急処置をされたと伝えられています。日野原先生の数々のエピソードの中で、先生の先見性を世に示された最も有名なエピソードとして、今も語り継がれています。なお、この後、大きな病院では、それぞれ大規模災害に対して、何らかの対策を考慮するようになったそうです。

このような先見性のある業績をあげられた先生は、翌年の1996年に、財団法人聖路加国際病院の理事長に就任され、同時に病院の名誉院長になりました。そして、その先見性を私どもに対しても、発揮してくださいることになります。

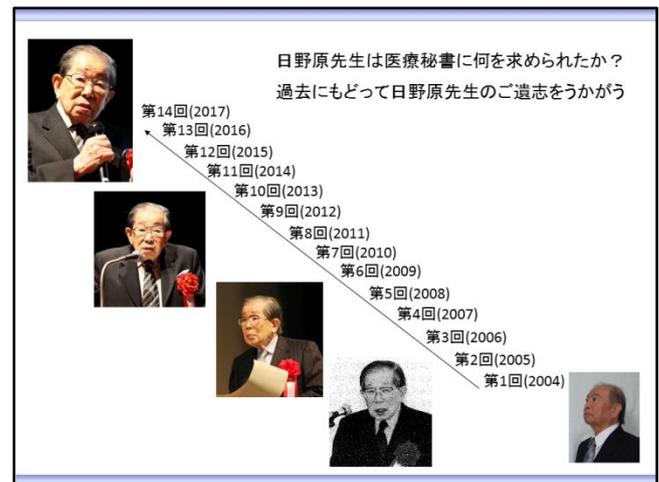
すなわち、2003年5月の医療秘書教育全国協議会の理事会・定期総会の席上で発言され、「皆さんが養成された医療秘書の方々の卒後教育や生涯教育にも力を注ぎなさい。学会をつくったらどうですか」とご提言されたとうかがっています。

このご指導を受けた方々の努力が結実して、医療秘書教育全国協議会の全面的な支援のもとに、2004年2月11日に、日本医療秘書学会の設立総会が開催され、日野原先生が学会長に就任されました。先生は引き続き同日に開催された第1回学術大会を、学術大会長として主催され、最初の基調講演をしてくださいました。

以降、14年間にわたって私たちを導いてくださった偉大な指導者を、いま私たちは喪ってしまいました。

謹んで哀悼の意を捧げるとともに、先生が、あなた方、すなわち医療秘書の方々、および、それをめざしている方々に、何を期待しておられたか、ここで今一

度振り返って、皆様と一緒に、考えてみたいと思います。



日野原先生は医療秘書に何を求められたのか？

私は、ここで、過去に戻って先生のご遺志をうかがう方法により、それを考えてみたいと思います。

それが可能なのは、先生が私たちに、毎回の学術大会で基調講演をしてくださり、その記録が全て学会誌に残っているためです。私は、それをすべて拝読することができました。

また以前、日野原先生は、ご講演に際して、オーバーヘッドプロジェクターを愛用しておられましたが、第6回大会以降は、スライドを使用されるようになりましたので、そのスライドをお借りすることもできました。全てをご覧に入れる時間はありませんが、時間の許す限り、私なりに日野原先生のお考えをフォローしてみたいと思います。

日本医療秘書学会第1回学術大会(2004)

学会長基調講演「医のサイエンスとアート」

「医学はサイエンスに基づいたアート(技)である」

ウィリアム・オスラー (内科医、ジョンズ・ホプキンス大学医学部教授)

「皆さん(医療秘書)の技というものは、医療の大きなシステムの中で、情報を上手に整理して、患者さん中心にそれが有効に活用されるように発揮されなければならないのです」

〔()内と下線は鈴木〕

第1回学術大会の基調講演の題名は「医のサイエンスとアート」でした。

日野原先生は、ウィリアム・オスラー先生の「医学はサイエンスに基づいたアート(技)である」と言う言

葉を引用されて、「皆さん(医療秘書)の技というものは、医療の大きなシステムの中で、情報を上手に整理して、患者さん中心にそれが有効に活用されるように発揮されなければならないのです」と説明されました。これが「医療秘書の技(わざ)の最も基礎である」とする先生のお考えを示したものと思います。



William Osler(1849~1919)
(出典 http://iso-labo.com/labo/words_of_William_Osler.htm)

カナダのオンタリオ州生まれ
ケベック州モントリオールのマギル大学医学部を卒業 内科医
母校マギル大学医学部教授
米国ジョンズ・ホプキンス大学医学部教授
英国オックスフォード大学医学部教授



第1回学術大会の日野原先生(1911~)

日野原重明・仁木久恵(訳)「平静の心ーオスラー博士講演集」2003
日野原重明(著)「医学するところーオスラー博士の生涯」岩波現代文庫 2014

日野原先生は、ウィリアム・オスラー先生に私淑しておられ、その言葉をしばしば引用されます。

オスラー先生は、日本で言う江戸時代の末、黒船が来襲していた頃に、カナダのオンタリオ州でお生まれになり、第一次世界大戦が終わった翌年に亡くなっておられます。

オスラー先生が亡くなられた時、日野原先生は8歳ですから、生前のオスラー先生にお会いになったはずはありません。

恐らく著書を通じて共感され、尊敬しておられるのであろうと思います。

先生と仁木先生の共訳で「平静の心ーオスラー博士講演集」と言うご本を2003年に出版しておられます。

また、先生の著作で「医学するところーオスラー博士の生涯」と言う本も2014年に出版されており、そのご理解の深さが偲べれます。

第2回学術大会の基調講演の題名は「医療秘書の新しい役割」でした。

その中で日野原先生は、フランスの画家ゴーガンが自らの絵につけた画題名「人間とは、どこから来て、今どうあり、どこに行くのか」を紹介されて、「私はこのゴーガンの言葉と医療とを重ね合わせて考えています。医療秘書として従事しているみなさんにも医療がどこに行こうとしているのか、よく考えていただきたい」と言われました。

日本医療秘書学会第2回学術大会(2005)

学会長基調講演「医療秘書の新しい役割」

「人間とは、どこから来て、今どうあり、どこに行くのか」

ーゴーガン (Eugene Henri Paul Gauguin, フランスの画家, 1848~1903)

「今はコンピュータ・IT(Information Technology)時代、病院にもコンピュータが導入され、いろいろなデータが集められている。しかし、そのデータの意味を適切に理解することができていない。医療秘書はそのデータのもつ意味を正しく理解できなければならない。医療秘書の業務内容は“サーチャー”(Searcher)の仕事である。」

(Searcherの和訳は探索者・調査者などであるが、ここで日野原先生は、数多のデータのなかから、必要・適切なものを探し出して、それを必要とする者に、求められる前に、提供することができる役割りを果たす者としている。)

そして先生は「今は、コンピュータ・IT(Information Technology)時代、病院にもコンピュータが導入され、いろいろなデータが集められている。しかし、そのデータの意味を適切に理解することができていない。医療秘書はそのデータのもつ意味を正しく理解できなければならない。医療秘書の業務内容は“サーチャー”(Searcher)の仕事である。」と言うことを皆様に説かれました。

Searcherの和訳は探索者・調査者などですが、ここで日野原先生は、数多のデータのなかから、必要・適切なものを探し出して、それを必要とする者に、求められる前に、提供することができる役割りを果たす者としておられると考えます。



『われわれはどこから来たのか われわれは何者か われわれはどこへ行くのか』1897-1898年(ボストン美術館)
(出典: <http://ja.wikipedia.org/>)



(Paul Gauguin 1848~1903)

D'ou Venons Nous / Que Sommes Nous / Ou Allons Nous (左上隅のフランス語画題)
「人間とは、どこから来て、今どうあり、どこに行くのか」(日野原先生 訳)



第2回学術大会において
オーバーヘッドプロジェクターを
使用して講演される日野原先生

恐らく皆様もご存じのフランスの画家、ポール・ゴーガンは、ゴーギャンとも書かれることがありますが、先ほどのウィリアム・オスラー先生と殆ど同じ時代の人です。

このスライドの左上側が米国のボストン美術館に展示されている問題の絵で、ここに書かれている3行のフランス語が、その絵の左上隅にあり、それがこの

絵にゴーガンが自らつけた題名だそうです。

絵の下の欄外に書かれているように、わが国では「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこに行くのか」と翻訳されていることが多いようですが、日野原先生の翻訳は「人間とは、どこから来て、今どうあり、どこに行くのか」でした。このフランス語綴りを、強いてカナ読みにすると、

D' ou Venons Nous ドウ・ヴノン・ヌ?

Que Sommes Nous ク・ソンム・ヌ?

Ou Allons Nous ウ・アロン・ヌ?

このようになるそうですが、私は、フランス語を習ったことが無く、この発音も正しくできなければ、意味もわかりません。日野原先生は実に博識、多才な方であると感嘆するばかりです。

ついながら、下段の写真は、第2回学術大会で日野原先生がこの講演をしておられるところです。オーバーヘッドプロジェクターを使って講演なさるのが、当時の日野原先生のお好みのスタイルでした。

日本医療秘書学会第3回学術大会(2006)

学会長基調講演『「医療の質」の本質』

「何よりも大切にすべきは、ただ生きるのではなく、よく生きることだ」 (Quality of Life, QOL が大切との考え方の始まり)
— ソクラテス (古代ギリシャ・アテナイの哲学者、B.C.469~B.C.399)

「QOLを“生活の質”と訳しているが、本来は“命の質”である。21世紀はチーム医療の時代である。そのなかで、私たちは、ただ一方的に医療を提供するのではなく、患者の声を聞かなくてはならない。私たちが言うのではなく、患者の考えるQOLが大切と思う。皆さん(医療秘書)も患者の命の質に対して自分がなにができるかを考え、学問的にも技術的にもレベルを高めて貢献していただきたい。」

第3回学術大会の基調講演の題名は「『医療の質』の本質」でした。

日野原先生は、古代ギリシャ・アテナイの哲学者、ソクラテスの言葉、「何よりも大切にすべきは、ただ生きるのではなく、よく生きることだ」を引用されて、次のように申されました。

「QOLを“生活の質”と訳しているが、本来は“命の質”である。21世紀はチーム医療の時代である。そのなかで、私たちは、ただ一方的に医療を提供するのではなく、患者の声を聞かなくてはならない。私たちが言うのではなく、患者の考えるQOLが大切と思う。皆さん(医療秘書)も患者の命の質に対して自分がなにができるかを考え、学問的にも技術的にもレベルを高めて貢献していただきたい。」

これは、この日本医療秘書学会創設の目的を端的に述べられたとも考えられます。

日本医療秘書学会第4回学術大会(2007)

学会長基調講演

「変わりゆく医療環境の中での医療秘書の新しい役割」

「システムはあなたたちの心の中、頭脳にある。システムの価値を信じて、確信を持って勇氣ある行動をなさい」

— プラトン (古代ギリシャ・アテナイの哲学者、B.C.427~B.C.347)

「(人的環境は変えることができる。それによって医療システムの効率性を、経済原則に従って、追求していかなばならない。そのなかで)患者にファーストコンタクトするのは医療秘書の業務のフロントである。そこからバックにどのような情報をおくるのか、患者や家族に接する理論と実際、知識とテクニックの勉強を、今よりもっと濃厚にさせないと医療秘書の知的な進歩はありません。」

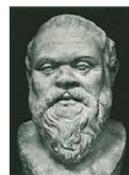
第4回学術大会の基調講演の題名は「変わりゆく医療環境の中での医療秘書の新しい役割」でした。

ここでの日野原先生は、同じく古代ギリシャ・アテナイの哲学者、プラトンの言葉、「システムはあなたたちの心の中、頭脳にある。システムの価値を信じて、確信を持って勇氣ある行動をなさい」を引用されて、次のように述べられました。

「(人的環境は変えることができる。それによって医療システムの効率性を、経済原則に従って、追求していかなばならない。そのなかで)患者にファーストコンタクトするのは医療秘書の業務のフロントである。そこからバックにどのような情報をおくるのか、患者や家族に接する理論と実際、知識とテクニックの勉強を、今よりもっと濃厚にさせないと医療秘書の知的な進歩はありません。」

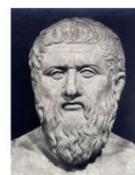
これは、前回のご指摘を、さらに角度を変えて述べられたものと思います。

古代ギリシアの2大哲人



ソクラテス (B.C.469~B.C.399)

(出典 blog.goo.ne.jp)



プラトン (B.C.427~B.C.347)
ソクラテスの弟子

(出典 プラトン-wikipedia)

ソクラテスは著作をしなかったそうです。従って彼の思想と行動は、すべて彼の弟子たちが書き残したのものによって、伝えられています。その中でもプラトンが書いた「ソクラテスの弁明」と「クリトン」が有名で、「何よりも大切にすべきは、ただ生きるのではなく、よく生きることだ」とのソクラテスの言葉は「クリトン」の中に書かれているそうです。

日野原先生が、この2回でその言葉を引用されたソクラテスとプラトンは、「古代ギリシアの2大哲人」と言われる方々です。

今から2,500年ほど昔の方々ですが、生まれ年も亡くなった年もわかっています。古代ギリシア文明は偉大ですね。

プラトンはソクラテスよりも42歳年下のお弟子さんで、ソクラテスが70歳で亡くなった時、28歳であったこととなります。

そのプラトンは80歳で亡くなられるまでに数々の著作を残されました。お二人ともこの時代の人としては長命ですね。

ところでソクラテスは著作をしなかったそうです。従って彼の思想と行動は、すべて彼の弟子たちが書き残したものによって、伝えられています。

その中でもプラトンが書いた「ソクラテスの弁明」と「クリトン」が有名で、「何よりも大切にすべきは、ただ生きることではなく、よく生きることだ」とのソクラテスの言葉は「クリトン」の中に書かれているそうです。

お恥ずかしいことですが、私はこのことを耳学問として知っているだけで、「ソクラテスの弁明」も「クリトン」も読んでいません。教養の不足です。日野原先生はお読みになっておられたと思います。私の残りの余命は、日野原先生ほどはまったく見込めませんので、先生に追いつくどころか、差を少しだけ縮めることすら絶望的です。

お話が脱線しましたが、本題の学術大会の基調講演にもどします。

日本医療秘書学会第5回学術大会(2008)

学会長基調講演「医のサイエンスとアートについて」

「医療秘書の仕事を考える場合に、これからの医療の発展の方向を知らねばならない。(分子生物学の大躍進、専門化と同時にプライマリケアの展開、患者が考えるQOLの尊重、ホスピスケアの発展、24時間通信網の発達でコミュニケーションの重要性がさらに増大する。)」

「医療秘書は、専門学校を出たら終わりではないのです。そこから始まる。これから本番が始まる。自己学習が始まる。カリキュラムがなくても自分で情報のネットワークを上手に使うって勉強しなさい。」

第5回学術大会の基調講演の題名は、再び「医のサイエンスとアートについて」でした。

「医療秘書の仕事を考える場合に、これからの医療

の発展の方向を知らねばならない。(分子生物学の大躍進、専門化と同時にプライマリケアの展開、患者が考えるQOLの尊重、ホスピスケアの発展、24時間通信網の発達でコミュニケーションの重要性がさらに増大する。)」と指摘され、次のように言われました。

「医療秘書は、専門学校を出たら終わりではないのです。そこから始まる。これから本番が始まる。自己学習が始まる。カリキュラムがなくても自分で情報のネットワークを上手に使うって勉強しなさい。」

この後段の皆様に対するご要望が、この講演で先生が最もおっしゃりたかったことではないかと思えます。

しかし、この様に申しあげていて、私は、先ほどの私の繰り返言に対して、先生が天国から「こら、お前もだぞ」と言われているように思えてなりません。

日本医療秘書学会第6回学術大会(2009)

学会長基調講演「チーム医療のエッセンスと行動目標」



「医療秘書は末端の仕事ではない。この関係がスムーズに機能するように、医療に関する幅の広い常識がなければならない。」

第6回学術大会の基調講演の題名は、「チーム医療のエッセンスと行動目標」でした。

この回から、日野原先生はPowerPointのスライドを使うようになられましたので、ここに示した模式図は、先生のスライドからコピーさせていただきました。

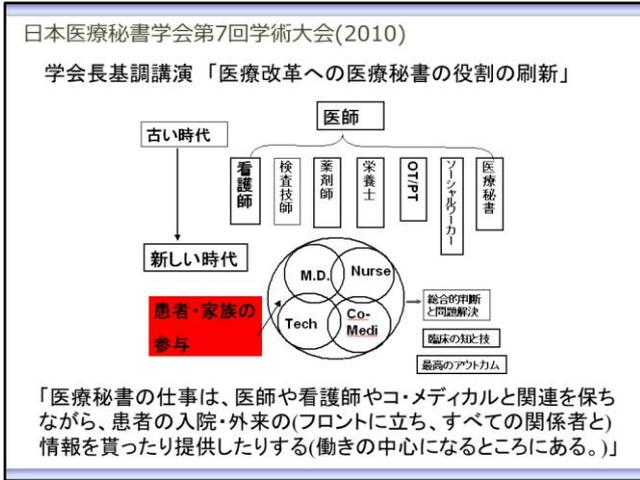
この医療秘書が中心になっているチーム医療の模式図は、このあと、繰り返し提示され、あなた方のチーム医療における立ち位置を示す、日野原先生の基本的な考え方を表しています。

そして「医療秘書は末端の仕事ではない。この関係がスムーズに機能するように、医療に関する幅の広い常識がなければならない。」と諭されました。

第7回学術大会の基調講演の題名は、「医療改革への医療秘書の役割の刷新」でした。

この図も、先生のスライドからコピーさせていただきました。

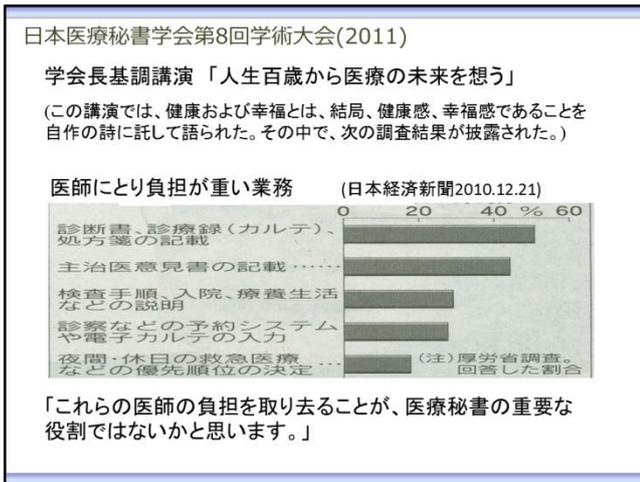
この時のご講演では、前回示したあなた方のチーム医療における立ち位置が、歴史的に発展したものであることを述べられました。



即ち、「古い時代」は、上のように、全ての職種が医師のもとにあったのですが、「新しい時代」は、下のように、チーム医療の時代になったことを説明されました。

ここで、患者や家族のことも導入されましたが、これはのちに、もっと洗練された模式図に発展します。

そして「医療秘書の仕事は、医師や看護師やコ・メディカルと関連を保ちながら、患者の入院・外来の(フロントに立ち、すべての関係者と)情報を貰ったり提供したりする(働きの中心になるところにある。)」と告げられました。



第8回学術大会の基調講演の題名は、「人生百歳から医療の未来を想う」でした。

先生は、この年の秋に100歳になられますので、このような演題名をお付けになりました。ここでのご指摘は「これらの医師の負担を取り去ることが、医療秘書の重要な役割ではないかと思えます。」でした。

この「医師にとり負担が重い業務」について特に言及されことは、「医師事務作業補助体制加算」が既に創設され(2008年)、「医師事務作業補助者」がこれらの業務をカバーするべく活動を開始していることを踏まえて、その発展を期待される趣旨であったと思われる。ことによると、これらの業務が、先生の医師としての「幸福感」を阻害していたのかも知れません。そこで、先生の「自作の詩」を今一度ご披露しておきたいと思えます。次の4枚のスライドは、この時のご講演で、先生が使われたスライドそのものです。

健康とは
 日野原重明

健康には二つがある
 一つは 外へ向かうからだの健康
 もう一つは 内へ向かうこころの健康

体(からだ)が病むと心がうずき
 食欲もなくなり
 人は生きる気力を失う

たとえ病気や加齢で体力が衰えても
 内なる自己に 今日も生きることを許
 されている特権に
 感謝を捧げることができれば
 君にはまだまだ生きるエネルギーが
 からだに生じる

体(からだ)は病んでも
 また老いても
 心の中にいのちの健康感が
 漂(ただよ)えば
 そこに健康が実存する

健康とは
 つまるところ 湧き出(い)でる
 健康感なのだ

健康とは

健康には二つがある—

一つは 外へ向かうからだの健康
 もう一つは 内へ向かうこころの健康

体(からだ)が病むと心がうずき
 食欲もなくなり
 人は生きる気力を失う

たとえ病気や加齢で体力が衰えても
 内なる自己に 今日も生きることを
 許されている特権に
 感謝を捧げることができれば
 君にはまだまだ生きるエネルギーがからだに生じる

体(からだ)は病んでも
 また老いても
 心の中にいのちの健康感が
 漂(ただよ)えば
 そこに健康が実存する

健康とは
 つまるところ 湧き出(い)でる
 健康感なのだ

幸福とは

幸福とは
 幸福感を持つこと
 幸福とは心が満たされて幸福だと
 感じる主観的な感覚

同じ状況でも
 人によってその感覚をもてる人と
 持てない人とがある

素朴な生活や貧しさの中では
 また災害時や戦場の厳(きび)しい環境下では
 人からのわずかな親切や思いやりが
 幸福感をもたらせてくれる

だが 文明や平和の恩寵に
 長く浴している人々には
 幸福だと感じるハードル(閾域(しきいき))が
 高くなり
 幸福感は鈍くなる

幸福とは
 そうだ 上を向いて歩く人々が
 めいめいの胸にもつ
 幸福感のことなんだ

幸福とは
 幸福とは
 幸福感を持つこと
 幸福とは心が満たされて幸福だと
 感じる主観的な感覚
 同じ状況でも
 人によってその感覚をもてる人と
 持てない人とがある
 素朴な生活や貧しさの中では
 また災害時や戦場の厳(きび)しい
 環境下では
 人からのわずかな親切や思いやりが
 幸福感をもたらせてくれる

日野原重明

だが 文明や平和の恩寵に
 長く浴している人々には
 幸福だと感じるハードル(閾域(しき
 いき))が高くなり
 幸福感は鈍くなる
 幸福とは
 そうだ 上を向いて歩く人々が
 めいめいの胸にもつ
 幸福感のことなんだ

日本医療秘書学会第9回学術大会(2012)
 学会長基調講演「変わってくる医療と医療秘書の新しい使命」

L.Weed(1969) "Medical Records, Medical Education, and Patient Care"

(1969(S.44)、コンピュータが発達途上の時代に、電子カルテを中心にしてすべての記録をコンピュータに格納し、全職種が情報を共有する Problem Oriented Medical System. POMS の必要性を提唱したことを紹介され、そのなかに医療秘書を位置づけられた。)

「医療秘書が母国語以外の外国語をマスターし、電話で英語、中国語、韓国語で対応できるぐらいの語学力は、これからの医療秘書に必要になってきます。すでに医療秘書の資格を得た人は、もっとレベルが高くなるような勉強をされるよう希望します。」

第9回学術大会の基調講演の題名は「変わってくる医療と医療秘書の新しい使命」でした。

この中で日野原先生は、L.Weed という方が1969年に書かれた “Medical Records, Medical Education, and Patient Care” という文献に言及されました。

先生は、1969(S. 44)年というコンピュータが発達途上の時代に、電子カルテを中心にすべての記録をコンピュータに格納し、全職種が情報を共有する Problem Oriented Medical System, POMS の必要性を Weed 先生が提唱したことを紹介され、そのなかに医療秘書を位置づけられました。

日野原先生は、この文献を英文で読まれたのであろうと思います。そのためか、このご講演では、皆様に、かなりハードルの高い要望をされます。

「医療秘書が母国語以外の外国語をマスターし、電話で英語、中国語、韓国語で対応できるぐらいの語学力は、これからの医療秘書に必要なってきます。すでに医療秘書の資格を得た人は、もっとレベルが高くなるような勉強をされるよう希望します。」
いかがでしょうか？これはなかなか大変です。

日本医療秘書学会第10回学術大会(2013)

学会長基調講演
「TEAM BASED LEARNING の中で医療秘書の役割」

Larry Michaelsen et al: Team-Based Learning for Health Professions Education
[和訳] 瀬尾宏美(監修)「TBL-医療人を育てるチーム基盤型学習」

2009年出版のこの本は「各種のチームメート(医学生、看護学生、検査技師、PT、OT、栄養士)が学生のうちからチームを組み、学習方法を考え、分担内容も考えて学習する方法」を紹介している。



「このように何でも新しいことや、今までにはない発想をすることが大切です。医療秘書学会員も、今までやったことのないこと、何か新しいことがないかと考えることが必要です。チームの一員として、それをするにはどうしたらよいかを考えるようにしてください。」

第10回学術大会の基調講演の題名は「TEAM BASED LEARNING の中で医療秘書の役割」でした。

このご講演でも、Larry Michaelsen という方が “Team-Based Learning for Health Professions Education” という書物の中で述べられている新しい教育方法を紹介されましたが、これは幸いにも訳本がありますので、ハードルをやや下げてください。日野原先生は、“Team based learning” という着想を高く評価されて「このように何でも新しいことや、今までにはない発想をすることが大切です。医療秘書学会員も、今までやったことのないこと、何か新しいことがないかと考えることが必要です。チームの一員として、それをするにはどうしたらよいかを考えるようにしてください。」と要望されました。

絶えず知識を広げられて、新しいことに注目され続ける先生の知識欲に深甚の敬意を捧げさせていただく一方、私どもにも同じ事を求めておられるとすると、

ハードルはあまり下がっていないようにも思われました。

ともあれ、次年度と次々年度のご講演で、「チーム医療」の重要性を再度述べられる展開になります。

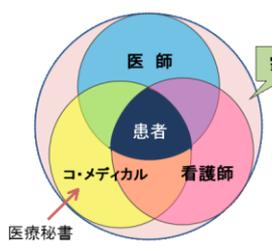
第11回学術大会の基調講演の題名は「私の見た75年にわたる日本の病院と医療秘書への期待」でした。

その核心は、「新しい医療はチーム医療である」とのご認識で、これまでもしばしば提示されたチーム医療の模式図の完成形をこのように示されました。

日本医療秘書学会第11回学術大会(2014)

学会長基調講演
「私の見た75年にわたる日本の病院と医療秘書への期待」

「新しい医療はチーム医療である」
「よいチーム作りに成功するか否かは、よいコミュニケーションづくりにかかっている」



- 「①言葉のプロになろう」
- 「②非言語コミュニケーションを使う」
- 「③聴く態度を忘れるな」
- 「④方法の基本に忠実に」
 - 言葉と声
 - 接する態度
 - 机や椅子の配置
 - 空間と照明

患者が中心に描かれ、家族もこのように示されています。ただし、この図の根底には、第6回学術大会で示された「医療秘書はチームワークの中心となるべきである」とのお考えが不動のものとして存在します。

そのために、次の「よいチーム作りに成功するか否かは、よいコミュニケーションづくりにかかっている」との方法論が提示されています。このご講演では、それを次の4項目に分けて詳述されました。

「①言葉のプロになろう」

これが必要なことは疑問の余地のない大前提ですが、実は、ある研究によると、言葉で伝わるのは35%に過ぎないとの結果もあるそうです。そこで、

「②非言語コミュニケーションを使う」という必要が生じてきます。狭くは動作、ジェスチャー、表情など「ボディランゲージ」ですが、④の項目をみると、もっと広い理解もありそうです。

「③聴く態度を忘れるな」

これがなければコミュニケーションは成り立たないことが誰にも明らかですが、つい忘れがちになることを戒められました。

「④方法の基本に忠実に」

言葉と声、接する態度、机や椅子の配置、空間と照

明、これらに常に心配りができると医療秘書の評価が高まるでしょう。広い意味での非言語コミュニケーションとも思われます。

日本医療秘書学会第12回学術大会(2015)
 学会長基調講演「医療は将来どう変わっていくか
 —医療秘書の新しい役割—」

医療におけるチームプレーの重要性

環境情報 → 医療職者による患者の問題解決
 患者・家族からの情報 → 医療職者による患者の問題解決

1. 身体的アプローチ	患者の身体上の問題とその科学的実証
2. 人間的アプローチ	患者が置かれている心の条件 患者の問題意識の把握と対応
3. 社会的アプローチ	患者の日常の活動・家庭状況、職場・環境
4. QOLにかかわるアプローチ	人生観、死生観、宗教、生き甲斐(価値観)

第12回学術大会の基調講演の題名は「医療は将来どう変わっていくか—医療秘書の新しい役割—」でした。

ここで日野原先生は次のように述べられました。

「医療は医師だけで対応できるものではありません。チームワークが重要であるということを強調したいと思います。

患者さんの問題解決には、多方向から取り組まなければならないなりません。環境からの情報、患者・家族からの情報も大切です。

身体的アプローチには、患者の身体上の問題とその科学的な実証が必要です。

また、人間的なアプローチとは、患者が置かれている心や精神の状態を知ることです。

社会的アプローチとは、患者の日常生活、家庭状況、職場・環境に関するものです。

QOL(クオリティ・オブ・ライフ)に関わるアプローチとしては、その患者の人生観や死生観、宗教、生き甲斐なども含めて全人的に理解することです。

これらは単独ではできませんから、チームワークによって取り組まなければならないなりません。」

これは、日野原先生がこれまでもしばしば述べられた「チーム医療」とそれに必要な「チームワーク」についての総まとめだと思います。

第13回学術大会の基調講演の題名は「医療の未来はようになるか～変わってくる最新の医療の中で医療秘書の新しい役割～」でしたが、ご講演の核心は、その後半で「心を耕すことの大切さ」を説かれた部分で

あったように思います。

日本医療秘書学会第13回学術大会(2016)
 学会長基調講演「医療の未来はようになるか
 ～変わってくる最新の医療の中で医療秘書の新しい役割～
 心を耕すことの大切さ

狭い田んぼを深く耕せ
 長福寺 上沼雅龍住職の師の教え 月刊誌『在家仏教』(2013)

自分の心を耕すことが自己形成である
 京都大学哲学科 西谷啓次教授(1900-1990)の講話より

豊かな感性を身につけるために

諸君の仕事のゆうに3分の1は、
 専門書以外の範疇に入るものである。
 ウイリアム・オスラー教授「平静の心」(1903)より

先生は、まず、長福寺の上沼住職が「狭い田んぼを深く耕せ」と師匠から教えられたことを紹介されました。

次いで、京都大学哲学科 西谷教授が講話の中で「自分の心を耕すことが自己形成である」と述べられたが、この二つの言葉は、全く同様のことを言っているのであり、それは「心を耕すことの大切さ」を説かれたものでと言われました。

また、「豊かな感性を身につけるために」は、ウイリアム・オスラー先生が「諸君の仕事のゆうに3分の1は、専門書以外の範疇に入るものである」と言われたことを知っておきなさい。

そしてこれら三つの言葉は、全て同じ事を言っているのですと述べられました。

日本医療秘書学会第14回学術大会(2017)
 学会長基調講演「愛の心と医療秘書に触れて」

ナースとして知識の光に明かりを添えらるとすれば、次の7つの徳があります。気転(tact)、清潔さ(tidiness)、寡黙(taciturnity)、思いやり(sympathy)、親切さ(gentleness)、明るさ(cheerfulness)、そしてこれらすべては慈愛(charity)によってつながっているものなのです。

ウイリアム・オスラー

「これは、オスラー先生が、ジョンズ・ホプキンス病院のナースに向けて話したのですが、私は、これらの徳がナースに限るものではないと思っています。これは、そっくりそのまま、医療秘書の皆さんにも当てはまる徳ではないか、と私は考えるのです。」

第14回学術大会で日野原先生は、「愛の心と医療秘書に触れて」の題名で基調講演をなさるご予定でしたが、2月の福島県郡山のあまりの寒さに、周囲の方々のお諫めを受け入れて、長文のご挨拶状をくださり、中村学術大会長に、その代読を依頼されました。この

スライドは、その後段の部分です。

「ナースとして知識の光に明かりを添えるとすれば、次の7つの徳があります。気転(tact)、清潔さ(tidiness)、寡黙(taciturnity)、思いやり(sympathy)、親切さ(gentleness)、明るさ(cheerfulness)、そしてこれらすべては慈愛(charity)によってつながっているものなのです。」

「これは、オスラー先生が、ジョンズ・ホプキンス病院のナースに向けて話したのですが、私は、これらの徳がナースに限るものではないと思っています。これは、そっくりそのまま、医療秘書の皆さんにも当てはまる徳ではないか、と私は考えるのです。」

そうして「これで私のご挨拶を終わります」とのお言葉でとじられました。

本当にこれが、日野原先生が私たちに語ってくださった最後のお教えになってしまいました。

それでは、この14回にわたる基調講演を通じて、日野原先生は医療秘書に何を求められたのでしょうか。私なりに纏めてみたいと思います。

日野原先生は医療秘書に何を求められたか

心(こころ) 愛の心



チームワーク コミュニケーション(医学用語)



技(わざ) 情報処理技術,コンピュータ,電子カルテ

まず、先生は、技(わざ)を求められたと思います。その核心は情報処理技術であり、かつては速記、現在ではコンピュータに支えられています。電子カルテも広く行き渡っています。それらを自在に操り、必要な情報を取り出す技(わざ)を医療秘書に求められたことは明らかです。

その基盤の上に、先生は、医療秘書がチームワークの中心となることを求めました。そのために医学用語を駆使したコミュニケーションに熟達することの必要性を指摘されました。

そうして、それらの最上位に、心(こころ)を置かれました。医療秘書の全ての働きに「愛の心」が伴うこ

とを、先生は、必須のこととされたと考えます。

医療秘書へ望むこと

病む人の喜びを私の喜びにしよう
病む人の悲しみを私の悲しみにしよう
病む人から与えられる鍵で
私たちの心の扉を開こう

日野原重明



これは、第11回学術大会での基調講演以降、毎回示された日野原先生のお言葉です。また、学会誌 Medical Secretary の全ての号の奥付に書かせてもいただいています。

「医療秘書へ望むこと

病む人の喜びを私の喜びにしよう
病む人の悲しみを私の悲しみにしよう
病む人から与えられる鍵で
私たちの心の扉を開こう」

今、私たちは、先生が築かれた土台の上で、新しい指導者と共に、新しい時代に向かって歩み出そうとしています。

そのような私たちを、天国から、暖かく見守り続けてくださいますようお願いして、追悼の講演をしめさせていただきます。

ありがとうございました。